

わがはい 吾輩は猫である。

吾^{わがはい}輩は猫である。名前はまだ無い。

どこで生れたかとうと見当^{けんとう}がつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。吾輩はここで始めて人間というものを見た。しかもあとで聞くとそれは書生という人間中で一番^{どうあく}憚^{つかま}悪な種族であったそうだ。この書生というのは時々我々を捕えて煮て食うという話である。しかしその当時は何という考もなかったから別段恐^にしいとも思わなかった。ただ彼の掌^{てのひら}に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフワフワした感じがあったばかりである。掌の上で少し落ちついて書生の顔を見たのがいわゆる人間というものの見始^{みはじめ}であろう。この時妙なものだと思った感じが今でも残っている。第一毛をもって装飾されべきはずの顔がつるつるしてまるで^{やかん}薬缶だ。その後猫にもだいぶ^あ逢ったがこんな片輪^{かたわ}には一度も出会わした事がない。のみならず顔の真中があまりに突起している。そうしてその穴の中から時々^{けむり}ぷうぷうと煙を吹く。どうも咽^むせぼくて実に弱った。

これが人間の飲む煙草^{たばこ}というものである事はようやくこの頃知った。

この書生の掌の裏^{うち}でしばらくはよい心持に坐っておったが、しばらくすると非常な速力で運転し始めた。書生が動くのか自分だけが動くのか分らないが無暗^{むやみ}に眼が廻る。胸が悪くなる。到底^{とうてい}助からないと思っていると、どさりと音がして眼から火が出た。それまでは記憶しているがあとは何の事やらいくら考え出そうとしても分らない。

ふと気が付いて見ると書生はいない。たくさんおった兄弟^{びぎ}が一疋も見えぬ。肝心の母親^{かんじん}さえ姿を隠してしまった。その上今までの所とは違って無暗^{むやみ}に明るい。眼を明いていられぬくらいだ。はてな何でも容子^{ようす}がおかしいと、のそのそ這^はい出して見ると非常に痛い。吾輩^{わら}は藁の上から急に笹原の中へ棄てられたのである。

ようやくの思いで笹原を這い出すと向うに大きな池がある。吾輩は池の前に坐ってどうしたらよかろうと考えて見た。別にこれという分別^{ぶんべつ}も出ない。しばらくして泣いたら書生がまた迎に来てくれるかと考え付いた。ニャー、ニャーと試みにやって見たが誰も来ない。そのうち池の上をさらさらと風が渡って日が暮れかかる。腹が非常に減って来た。泣きたくても声が出ない。仕方がない、何でもよいから食物^{くいもの}のある所まであるこうと決心をしてそろりそろりと池を左りに廻り^{ひだ}始めた。どうも非常に苦しい。そこを我慢して無理

やりに這^はって行くとようやくの事で何となく人間臭い
所へ出た。ここへ這^{はい}入ったら、どうにかなると思って
竹垣^{くず}の崩れた穴から、とある邸内にもぐり込んだ。
縁は不思議なもので、もしこの竹垣が破れていなかった
なら、吾輩はついに路傍^{ろぼう}に餓死^{がし}したかも知れん
のである。一樹の蔭とはよく云^いったものだ。この垣根
の穴^{こんにち}は今日に至るまで吾輩^{となり}が隣家の三毛を訪問する
時の通路になっている。さて邸へは忍び込んだものの
これから先どうして善^いいか分らない。そのうちに暗く
なる、腹は減る、寒さは寒し、雨が降って来るとい
う始末でもう一刻^{ゆうよ}の猶予が出来なくなった。仕方がない
からとにかく明るくて暖かそうな方へ方へとあるいて
行く。今から考えるとその時はすでに家の内に這入っ
ておったのだ。ここで吾輩^かは彼の書生以外の人間を
再び見るべき機会に遭遇^{そうぐう}したのである。第一に逢
ったのがおさんである。これは前の書生より一層乱暴な
方で吾輩を見るや否やいきなり頸筋^{くびすじ}をつかんで表^{ほう}へ抛
り出した。いやこれは駄目だと思ったから眼をねぶつ
て運を天に任せていた。しかしひもじいのと寒い^{すき}の
にはどうしても我慢が出来ん。吾輩は再びおさんの隙
を見て台所^{は あが}へ這い上った。すると間もなくまた投げ
出された。吾輩は投げ出されては這い上り、這い上っ
ては投げ出され、何でも同じ事を四五遍繰り返した
のを記憶している。その時におさんと云う者はつくづ
くいやになった。この間おさんの三馬^{さんま}を偷^{ぬす}んでこの返
報^{つかえ}をしてやってから、やっと胸の痞^{つかえ}が下りた。吾輩が

最後につまみ出されようとしたときに、この家の主人が騒々しい何だといいいながら出て来た。下女は吾輩をぶら下げて主人の方へ向けてこの宿なしの小猫がいくら出しても出しても御台所へ上って来て困りますという。主人は鼻の下の黒い毛を撚りながら吾輩の顔をしばらく眺めておったが、やがてそんなら内へ置いてやれといったまま奥へ這入ってしまった。主人はあまり口を聞かぬ人と見えた。下女は口惜しそうに吾輩を台所へ抛り出した。かくして吾輩はついにこの家を自分の住家と極める事にしたのである。